

世界が見える

日本が見える

感染症から社会変革

長崎大熱帯医学研究所教授
山本 太郎氏



やまもと・たろう 1964年広島県竹原市生まれ。長崎大卒。医師、医学博士。専門は国際保健学、熱帯感染症学。京都大医学研究科助教授、外務省国際協力局課長補佐などを経て現職。アフリカ各国や中米ハイチで感染症対策に従事。著書に「感染症と文明」(岩波新書)など。

パンデミック後、流れ加速

歴史を振り返れば、私たち人間は、幾度ものパンデミック(世界的大流行)を経験してきた。14世紀ヨーロッパで流行した黒死病(ペスト)や、コロンブスの新大陸再発見後の16世紀アメリカ大陸に広がった旧大陸の感染症。1918〜19年に世界を席巻したスペイン風邪(インフルエンザ)などである。そうした感染症は、私たちの社会をどのように変えてきたのだろうか。

14世紀にヨーロッパで流行したペストは、最終的に欧州全土を覆い、ヨーロッパ人口の4分の1から3分の1を奪う被害をもたらした。その様子は、イタリアの作家ボッカッチオの「デカメロン」(十日物語)に詳しい。作品には、ペストにあえぐ当時の社会状況が色濃く反映されている。

「一日千人以上も罹病しました。看病してくれる人もなく、何ら手当てを加えることもないので、皆果敢なく死んで行きました」(野上素一訳、岩波文庫)

半世紀にわたるペスト流行の後、ヨーロッパはある意味で静謐で平和な時間を迎えた。それが内面的な思索を深めさせたという歴史家もいる。そうした中で、ヨーロッパはイタリアを中心にルネサンスを迎え、文化的復興を遂げる。

変貌し、強力な主権国家を形成した。「神の怒り」と考えられた疫病に対して、何ら有効な手段を持てなかった教会の権威は失墜し、感染者を隔離できる力を持つ国家に権力の主体が移っていった。中世は終焉を迎え、ヨーロッパは近代を迎えた。

これがペスト後の欧州世界であった。そして変貌したヨーロッパは、アフリカや新大陸へと踏み出していく。それが新たな悲劇の幕開けともなる。

陸にのみ存在した感染症の広範かつ急激な流行の後に出現した社会は、それまで現地の人々が暮らしてきた社会とは異なる、スペイン人を中心とする別世界となった。

カナダ出身の歴史学者ウィリアム・マクニール氏は著書「疾病と世界史」で、新大陸の住民も疫病を「神の怒り」と解釈しており、その「神の怒り」が免疫のない新大陸住民に鉄鎧を振り下ろしたにもかかわらず、スペイン人の感染は少なく「神の恩寵」を受けているように見えた指摘した上で、以下のように述べている。

「聖なる理法も自然の秩序も、はつきりと原住民の伝統と信仰を非として違うのがやつの入り組んだ路地で、やることもなく座り込む人たちがいた。ごみだらけの川べりでは、裸の子どもが遊ぶ。「朝食を取らなくてもいいように、昼に起きるようになった。」「リオナ・ビセンテさん(38)は力のない笑みを浮かべた。感染拡大防止のため3月中旬に外出が原則禁止となり、働いていたファストフード店は一時休業に。月5千ペ(約1万円)の収入を失うことになった。」

はるかに、抵抗ということにどんな根拠が残っていたと言ったのか。スペインの征服事業が異常なほどの容易さだったこと、またわずかな数百人の男が広大な地域と数百万の人間をがっちり支配し得た事実は、このように考えてきて初めて理解できる」(佐々木昭夫訳、中公文庫)

ペスト以前と以降を比較すれば、ヨーロッパ社会は全く異なった社会へと

コロンブスによる再発見以降の16世紀南北アメリカは、感染症によって大きく影響を受けた。天然痘や麻疹(はしか)といった、新大陸にはなく旧大

「聖なる理法も自然の秩序も、はつきりと原住民の伝統と信仰を非として違うのがやつの入り組んだ路地で、やることもなく座り込む人たちがいた。ごみだらけの川べりでは、裸の子どもが遊ぶ。「朝食を取らなくてもいいように、昼に起きるようになった。」「リオナ・ビセンテさん(38)は力のない笑みを浮かべた。感染拡大防止のため3月中旬に外出が原則禁止となり、働いていたファストフード店は一時休業に。月5千ペ(約1万円)の収入を失うことになった。」

はるかに、抵抗ということにどんな根拠が残っていたと言ったのか。スペインの征服事業が異常なほどの容易さだったこと、またわずかな数百人の男が広大な地域と数百万の人間をがっちり支配し得た事実は、このように考えてきて初めて理解できる」(佐々木昭夫訳、中公文庫)

はるかに、抵抗ということにどんな根拠が残っていたと言ったのか。スペインの征服事業が異常なほどの容易さだったこと、またわずかな数百人の男が広大な地域と数百万の人間をがっちり支配し得た事実は、このように考えてきて初めて理解できる」(佐々木昭夫訳、中公文庫)



インド・ムンバイのスラムで、配給の食事を受け取る子どもたち。4月18日(AFP共同)

失業や不衛生 綱渡り



アジア各国のスラムで、新型コロナウイルス感染症の危険と隣り合わせで暮らす人たちがいる。汚水を直接川に捨てる不衛生な環境、狭い家にひしめく大家族。感染拡大のあおりで、辛うじて手にしていたわずかな収入を失い、綱渡りの生活を余儀なくされている。

フィリピンの首都マニラのインド地区。木材やトタンで造った粗末な家が密集し、人とすれ

違うのがやつの入り組んだ路地で、やることもなく座り込む人たちがいた。ごみだらけの川べりでは、裸の子どもが遊ぶ。「朝食を取らなくてもいいように、昼に起きるようになった。」「リオナ・ビセンテさん(38)は力のない笑みを浮かべた。感染拡大防止のため3月中旬に外出が原則禁止となり、働いていたファストフード店は一時休業に。月5千ペ(約1万円)の収入を失うことになった。」

政府は低所得層向けの支援金の支給を決めたが、いつ手元に届くか分からない。「既に5千ペをもらった家庭があると聞いた。地区の責任者が対象世帯を選別しているに違いない」とビセンテさん。支援の遅れから疑心暗鬼になり、地域住民の間に亀裂が入り始めた。



無職の女性(27)の家では、家族5人が川の字になって密着して寝る。家族という安心感が支えだが「マスクや消毒液を買いお金なんてないし、医療も受けられない」。出口の見えないトンネルにいるようで、ふとした瞬間に気がふさぐ。

3月25日から全土を封鎖したインド。西部ムンバイのダラビ地区は東京ドーム約40個分の面

はるかに、抵抗ということにどんな根拠が残っていたと言ったのか。スペインの征服事業が異常なほどの容易さだったこと、またわずかな数百人の男が広大な地域と数百万の人間をがっちり支配し得た事実は、このように考えてきて初めて理解できる」(佐々木昭夫訳、中公文庫)

は、家
密着し
感が支
を買
も受け
ないト
とした

積に100万人以上が暮らし、
アジア最大級のスラムとされ
る。ダラビ地区の感染者は4月
29日までに340人を超え、18
人が命を落とした。当局は消毒
作業を進めているが水道設備が
貧弱で手を洗うことも難しい。

鎖した
のダラビ
分の面

多くの人が工場や建設現場で
の仕事を失い、収入が途絶えた。
食事は州政府の配給が頼りだ。

非政府組織（NGO）の調査で
は、配給が1日1回だけのケー
スが大半で、食事が腐っていて
体調を崩す人もいた。スラムに
住む労働者ら数千人がムンバイ
の駅に集まって抗議し、警官隊
との小競り合いも起きた。

生活支援に取り組むNGOの
ムハンマド・シャイクさん(39)
は「住民は感染と飢えの恐怖に
直面している」とし、貧困層へ
の支援を急ぐよう訴えた。

（マニラ、ニューデリー共同）

マニラのスラム街トンド地区

▲遊ぶ子どもたち―4月17日

（共同）



はなく、民主主義的合意によって連帯
を深めるものとして用いられる社会で
あればよいと思うし、そうでなくては
ならないと信じている。

3月18日、ドイツのメルケル首相は、
今回の新型コロナウイルス感染症の対
策とその理解に向け、演説を行った。
彼女は旅行や移動の自由に対する制限
とその必要性に触れ、次のように述べ
た。

「開かれた民主主義に必要なことは、
政治的決断を透明にし、説明すること、
私たちの行動の根拠をできる限り示し
て、それを伝達することで、理解を得
られるようにすることだ」

その上で、基本的人権の制限は「絶
対的に必要な場合のみ正当化される」
もので、「民主主義社会において決し
て軽々しく、一時的であっても決めら
れるべきではない」と、その痛みと例
外性を強調した。（林フーゼル美佳子
訳、サイト「Mikakoドイツ語サ
ービス」）

旅行や移動の自由が厳しく制限され
た旧東ドイツ出身で、そうした自由が
苦勞して勝ち取られた権利であること
を誰よりも知る、彼女ならではの言葉
であった。少なくとも私は、そのこと
に自覚的でありたい。

感染症は社会の在り方がその様相を
規定し、流行した感染症は時に社会変
革の先駆けとなる。そうした意味で、
感染症の世界的流行は極めて社会的な
ものとなる。

歴史が示す一つの教訓かもしれな
い。

ただし、希望はある。それは私たち
の心の持ちようにある。